

II. 大分県の文化観光と別府温泉

奥 田 憲 昭

はじめに

1. 文化観光とはなにか
2. 大分県の文化観光の現状
3. 都市型温泉地としての別府温泉
4. 「別府八湯」の活性化と行政の役割

おわりに

>

はじめに

韓国映画「冬のソナタ」が日本で大ヒットして以来、韓国では文化観光に強い関心が寄せられている。この文化観光という用語は日本でも古くから用いられてきた。たとえば「京都国際文化観光都市建設法」や「奈良国際文化観光都市建設法」が昭和25年10月に施行されて今日まで存続している。これらの法律に基づく文化観光都市建設事業は京都市や奈良市が執行することになっているが、国ができる限りの事業の援助を行うこととなっており、実質上国家的事業として行なわれてきた。

同様の法律は松江市においても施行されている。しかし、事業が国家の援助を受けるといふこともあり、文化観光都市建設法が地方に広がることはなかった。ところが最近小泉内閣の「観光立国行動計画」の影響もあり、青森県が「青森県文化観光立県」宣言を行うなど、最近地方において文化観光による地域振興への関心が高まってきている。そこで本論文では大分県を事例とし、大分県

の文化資源を整理するとともに、大分県の文化観光を最も特徴づけている温泉観光、とりわけ観光客が圧倒的に多い別府温泉を取り上げ、その現状と課題について考察することとしたい¹⁾。

1. 文化観光とはなにか

観光という言葉を日本語の辞書で引いてみると、「他国の文化を観察すること。転じて、ふだん接することのない名所などを見物すること」とある²⁾。したがって日本語で観光という場合はもともと文化という意味を含んでおり、とくに文化観光と言わなくても観光と言えば、文化観光のことである、ということもできる。しかし、観光は観光資源から考えると、自然を資源とした自然観光と人間の創造物を資源とした文化観光とに分けられる。資源を自然資源・文化的（人文的）資源・社会的資源・産業的資源に分けて観光を考える場合もある³⁾。本論文においては観光を自然観光と文化観光とに分けて考えることとしたい。

ここで自然観光というのは自然そのものを観光するものを意味し、自然を活かして人間が創造したものを観光するものは文化観光の範疇に入れることとする。たとえばカナディアン・ロッキーを観光するような場合はカナディアン・ロッキーという雄大で美しい自然そのものを観光するということになる。ナイアガラの滝を観光する場合はナイアガラの滝そのものが観光資源である。しかし、日本の温泉観光のような場合はどうであろうか。確かに温泉も自然を資源としたものである。しかし、実際に観光客が楽しむ温泉は人間が手を加えて風呂にした人工的なものであり、さらに温泉に宿泊する場合の魅力は料理や部屋や庭を一体として楽しむところにある。こうした温泉の楽しみかたはきわめて日本人的なものであり、それは自然観光というよりも文化観光といったほうが適切である。ここではこうした自然を活用した観光も文化観光として取り扱う

(3) II. 大分県の文化観光と別府温泉

こととする。そこで文化観光は観光資源により次の五つのタイプに分けられる。

- ①自然を資源とする文化観光
- ②文化財を資源とする文化観光
- ③歴史的景観を資源とする文化観光
- ④建造物を資源とする文化観光
- ⑤イベントを資源とする文化観光
- ⑥生活文化を資源とする文化観光
- ⑦映画・小説・人物を資源とする文化観光

以下これらの文化観光について若干の説明を加え、大分県の事例を挙げておくこととする。

①自然を資源とする文化観光

温泉、公園、自然動物園、スキー場などがその例として挙げられる。ここでは大分県で最も多い観光資源である温泉を例に説明しておく。さきに述べたように温泉観光は観光客にとってたんに入浴を楽しむという以上の意味をもっている。温泉客がどこの温泉で宿泊するかを考える場合、温泉地の自然景観がどのようなものか、温泉の泉質がどのようなものか、といったことのほかに温泉設備がどのようなものか、宿泊施設がどのようなものか、庭などを含めた温泉の美的環境がどのようなものか、料理がどのようなものか、サービスがどのようなものか、料金がいくらかといったことを総合的に考えて判断する。これら温泉設備・宿泊施設・庭・料理・サービスといったものは全て人間の創造物であり、文化的なものである。同じ温泉でも西欧の温泉と日本の温泉ではこれら文化的要素が大きく異なっており、日本の温泉はまさに日本文化の象徴だと言っても過言ではない。

日本では北海道から大分県のある九州まで数多くの温泉がある。そうしたなかで大分県の別府温泉（別府八湯）は湯の量が最も多く、湯布院温泉は若い女

性に最も人気の高い温泉となっている。このほかにも大分県には数多くの温泉があり、温泉は大分県における最大の観光資源となっている。

②文化財を資源とする文化観光

ここで文化財というのは世界遺産や国宝のように人類や国家にとって価値の高い遺産として認定され、貴重な財産、遺産として保存されているものをいう。これら文化財の多くは観光資源として多くの観光客を引き付けている。日本の世界遺産（文化遺産）は現在のところ10遺産ある⁴⁾。これら日本の遺産には神社仏閣、城などの歴史的建造物が多い。また、日本の国宝は1059件でその内訳は、絵画155、彫刻123、工芸品252、書跡・典籍・古文書280、考古資料39、歴史資料1、建築物209件となっている。大分県の文化財のうち国宝に指定されているのは八幡神宮の総本宮で八幡造りと呼ばれる建築様式の宇佐神宮本殿、平安時代の木造建造物の富貴寺大堂、磨崖仏で全国唯一の国宝である臼杵磨崖仏、1209年制作された仏具で貴重な美術工芸品である孔雀文磬の四つである。これらはいずれも大分県の貴重な観光資源となっている。このほか国が古墳・城跡など歴史的文化遗产として指定する国指定史跡に名曲「荒城の月」で知られる「岡城跡」、キリシタン大名である大友宗麟が住んでいた「大友氏館跡」などがある。

③歴史的景観を資源とする文化観光

ここで歴史的景観というのは自然的景観と異なる人間が創りだした歴史的建造物が面的広がりをもつ景観を意味している。具体的には歴史的町並み、民族街、ウォーターフロントの建造物群などが挙げられる。

日本・韓国・中国などのアジア諸国には歴史的に古い都市が多く存在している。そうした歴史的遺産が町並みとして一定の面的広がりをもって残存している場合がある。日本の地方都市には封建時代の城下町の町並みがそのまま残っ

(5) II. 大分県の文化観光と別府温泉

ているところが多い。江戸時代の城下町は一定の地域構造をもっていた。武士階級の集まった武家屋敷街、商家の集まった商人街、寺の集まった寺社街、一般庶民の住宅地としての長屋街などがあつた。東京や大阪のような大都市もかつては城下町であり、こうした構造をもっていた⁵⁾。しかし、大きな城下町は天守閣や城郭などの建造物は残っているものの、明治時代以降の都市化のなかで面的広がりとしての歴史的町並みは解体されてしまっている。しかし、都市化の影響を被っていない地方都市にはこうした歴史的町並みが今日も残存しているところが見られる⁶⁾。大分県でも日田市（商人町）⁷⁾、臼杵市（寺社町）、杵築市（武家屋敷）にはこうした歴史的町並みが残っており貴重な観光資源となっている。このほか歴史的にはそれほど古くはないが、今日豊後高田市の商店街は戦後ベビーブーム世代のなつかしい商品を集めた「昭和のまちづくり」で人気を博している。

④ 建造物を資源とする文化観光

文化財として指定された城や神社などのほかに観光資源となっている建造物が多くある。リゾート地・博物館・遊園地・オートポリスなどである。

リゾート地の多くはリゾート法と呼ばれる総合保養地域整備法（1987年施行）によって整備されている。この法律は国民が余暇等を利用し滞在して行うスポーツ、レクリエーション、教養文化活動、休養、集会等の多様な活動に資するために、スキー場・ゴルフ場・マリーナ等のスポーツ・レクリエーション施設、劇場・動植物園・博物館等の教養文化施設、展望施設・温泉保養施設等の休養施設、会議場・展示施設等の集会施設、ホテル・貸し別荘等の宿泊施設、道路・ターミナル等の交通施設、ショッピングモール、地域特産物センターなどを整備しようとしたものである。都道府県が基本構想を策定してそれを国が認定し税制面などから支援することとなっている。現在日本全国で42のリゾート構想が存在しており、その一つに大分県の「別府くじゅうリゾート構想」（1989年

認可)がある。「別府くじゅうリゾート構想」の主要プロジェクトにはハーモニーランド、くじゅう高原「ガンジーファーム」、城島後樂園などが挙げられている。しかし現在、宮崎県のシーガイアや長崎県のハウステンボスなどリゾート法に基づく大型リゾート計画は行き詰まっているところが多く、その再生をいかに図るかが大きな問題となっている⁸⁾。

⑤ イベントを資源とする文化観光

イベントは常時ではなく1年に1回とか、2年に1回とかある程度長期の間隔をもって行なわれる催しであり、これらのイベントのなかに多くの人々を集める集客能力をもったものがある。このためイベントは有力な観光資源になる可能性をもっている。

観光資源としてのイベントには二つのタイプがある。一つはイベントそのものが観光資源となるものであり、他の一つはイベント自体が観光資源になるわけではないがその集客作用により観光と結びつくものである。前者を直接的イベント、後者を間接的イベントと呼ぶことにする。直接的イベントの例としては祭りやスポーツイベント、音楽や芸術に関するイベント、商品の販売を目的とするイベントなどが挙げられる。間接的イベントの例としては学会などさまざまな職場団体が開催する会議などを挙げることができる。たとえば会員数の多い全国的学会が別府のコンベンション・ホールで開催されると、学会への参加者は別府の温泉地に宿泊し、学会が終われば多くの参加者が別府や大分県内の町を観光する。

日本人は祭りが大好きである。春夏秋冬それぞれの季節にさまざまな祭りがある。祭りは地域と密着したローカルなイベントであるが、なかには全国から観光客を集めるものもある。さっぽろ雪祭り、青森ねぶた祭り、京都祇園祭、阿波踊りなどがその例である。大分県にはこうした全国的な集客力のある祭りは存在しない。しかし、日田市の祇園祭り、大分市の鶴崎踊り、姫島のキツネ

(7) II. 大分県の文化観光と別府温泉

踊りなどは文化的価値も高く、広域な地域から多くの愛好家を集めている。

スポーツイベントも立派な観光資源である。オリンピックやサッカーのワールドカップは国際的イベントであり、2年前に韓国との共催で行なわれたワールドカップでは海外から多くの外国人が日本を訪れた。日本国内では高校野球や国民体育大会など定期的に行なわれるスポーツイベントがある。これらイベントの開催期間中は全国から多くの観客が甲子園や開催地に訪れる。

大分県では2002年のワールドカップに合わせてサッカー競技場「ビッグ・アイ」が建設された。「ビッグ・アイ」で行なわれたゲームはわずか3ゲームであったが、国内はもとより海外から多くの観客が訪れ、大分に宿泊した。昨年からは、サッカーチーム「大分トリニータ」がJ1リーグに昇格して定期的にリーグ戦が開催されるようになり、県外から多くのファンが訪れている。年に数回「ビッグ・アイ」で開催されるリーグ戦をイベントと呼んでよいかどうかということはあるが、大分県にとって「ビッグ・アイ」で行なわれる「大分トリニータ」の試合は一つの観光資源であり、毎週テレビのスポーツ・ニュースで流される「大分トリニータ」の勝敗は大分県のPRに大きく貢献している。

⑥生活文化を資源とする文化観光

生活文化とは生活のなかから育まれた文化のことであり、広い意味では都市的生活様式とか農村的生活様式といった生活様式をも含めた概念としても使用される。もともと生活という概念が多様な側面をもっているため生活文化という概念も多様な意味をもっている。生活に関わる文化としては、衣食住に係わるもの、生産・生業に係わるもの、交通・通信に係わるもの、信仰に係わるもの、娯楽に係わるもの、社会生活に係わるものなどさまざまである。

しかし、これらのものがすべて観光資源になるわけではない。観光旅行には「見る」「食べる」「遊ぶ」というニーズが満たされる必要がある。このため「るるぶ」という旅行会社の雑誌が発行されているほどである。こうした観光

ニーズからすれば生活文化のうち観光資源となり得るのは「見る」ニーズに対応した「ショッピング」、「食べる」ニーズに対応した「料理」、「遊ぶ」ニーズ対応した「娯楽資源」の三つだと言えよう。

自然を見る自然観光だけでなく観光地の生活文化と結びついた商品を見て歩く「ショッピング」は観光旅行の楽しみであり、こうした商品を並べた市場、商店街、デパート、ショッピング・センターは大きな観光資源となっている。

大都市になるほど都心近くの商業施設は多様であり、それらは大都市観光の大きな魅力となっている。大分県のような地方中小都市の都心には大都市に見られるような人通りの多い商店街やショッピング・センターは存在していない。したがって海外からや国内の大都市からの観光客にとっては一般的には大分県内中小都市の商業施設にそれほど大きな魅力を感じるわけではない。しかしそれでも観光客は大分県の「おみやげ品」を求めてショッピング・センターを訪れる。

「料理」は海外旅行でも国内旅行でも重要な観光資源の一つである。海外旅行ではなによりも「料理」を通じて異文化を体験することができる。たとえば韓国を訪れて日本人が韓国文化を最も感じとれるのは韓国料理を食べたときではないかと思われる。もちろん日本の都市には世界各国のレストランがあり、日本でも韓国料理を味わうことはできる。大分にも韓国料理のレストランは何軒もある。しかし、韓国を訪れたときにはほとんどの日本人観光客が本場の韓国料理を食べたいと思っているはずである。

日本国内では地方ごとに地方独特の郷土料理がある。大分県は海の幸あり、山の幸ありで食材の豊富なところである。海の幸では「関サバ」・「関アジ」・「城下カレイ」といった魚が全国的に有名である。山の幸では「しいたけ」が日本一の生産量を誇っている。この「しいたけ」を使用した料理に「団子汁」という郷土料理がある。こうした郷土料理を味わうことは観光旅行の一つの楽しみだといえよう。

(9) II. 大分県の文化観光と別府温泉

観光資源としての生活文化というとき「遊ぶ」ニーズに対応した「娯楽資源」も重要な要素となる。観光の楽しみは「見る」「食べる」に重点が置かれているが、「遊ぶ」要素も欠くことはできない。スキーやゴルフをして遊ぶことを最初から目的とした観光もある。しかしそうでなくても、人によってはナイト・ライフにショーを観劇したり、ネオン街に足を運ぶのも楽しみの一つである。

大都市にはナイト・ライフが楽しめる施設がいっぱいある。しかし、地方小都市や農村ではショーを楽しんだり、コンサートを楽しんだりすることはできない。そこで地方の観光地では宿泊施設や観光地のなかにこうした遊びの要素を取り込んでいるところもある。たとえば日本の温泉地には街のなかに演劇場があつたり、ホテルにカラオケやダンスホールがあつたりする。

生活文化には都市的なものと農村的なものがある。都市の生活が人工的空間のなかでテンポの速い生活リズムになりがちなのに対して、農村では自然空間のなかでゆったりとした生活リズムで過ごすことができる。近年日本ではこうした農村の豊かな自然とゆとりのある生活を資源として都市からの訪問客を呼び込もうというグリーン・ツーリズムへの関心が高まっている⁹⁾。グリーン・ツーリズムはヨーロッパ諸国では既に広く定着している。しかし、日本では最近になってようやく関心が高まってきたところである¹⁰⁾。グリーン・ツーリズムの魅力は「体験する・食べる・語らう」にあり、「見る・食べる・遊ぶ」といった観光とは趣を異にしている。しかし、これも一種のツーリズムであり生活文化を資源とする文化観光と見なすことができる。

過疎農村の多い大分県では最近このグリーン・ツーリズムに力を入れるところが多くなってきている。なかでも「安心院町」は「グリーン・ツーリズム」を中心としたまちづくりで小泉内閣の施策の「構造改革特区」に指定されている。

⑦映画・小説・人物を資源とする文化観光

映画やテレビドラマがヒットしてその舞台となった都市の観光客が増加することがしばしばある。最近では韓国映画の「冬のソナタ」が大ヒットし、大分市の書店にも「冬のソナタ」コーナーが設置されているほどである。そこには「冬のソナタ」の書物やペ・ヨンジュンやチェ・ジウの写真、さらにはロケ地の絵葉書など冬のソナタに関連したグッズが多数陳列されている。「冬のソナタ」のロケ地である春川には今多くの日本人観光客が訪れている。

日本国内においても映画やテレビドラマがヒットしてその舞台となった都市の観光客が急増するということはこれまでもしばしばあった。大分県ではかつて臼杵市を舞台とした「なごり雪」という映画がヒットした。「冬のソナタ」のように日本中の大ブームになるということはなかったが、それでも臼杵市は「なごり雪」の舞台として知られ、その年の観光客は増加した。ただ映画の場合はブームであるからいつまでも続かず、今年度の臼杵市の観光客は当時に較べると減少している。

映画のほかに小説や詩が観光資源となることがある。小説や詩で知られる町はじつに多くあるが、代表的なものとしては、夏目漱石「坊ちゃん」の舞台となった四国愛媛県松山市、壺井栄の「二十四の瞳」の舞台となった香川県小豆島、詩人北原白秋の生まれ故郷で詩でも歌われている福岡県柳川市などがある。これら小説の舞台となったまちでは作家の記念館を建設したり、小説に係わる資源を保存したりして観光資源としている。大分県には菊地寛の小説「恩讐の彼方に」で全国的に知られる名所旧跡「青の洞門」が本耶馬溪町にある。

このほか文芸的観光資源としては小説家などの記念館、文学館、生家などがある。日本の地方自治体は文化政策の一環としてこうした地元出身文化人の記念館の建設や生家の保存に力を注いできた。こうした施設は全国でおよそ300近く存在している。大分県の施設では三浦梅園資料館、廣瀬淡窓資料館、福沢諭吉記念館、野上弥生子記念館、国木田独歩館、わらべの館（久留島武彦）な

どがよく知られている。

以上観光資源を七つに分け、観光資源ごとの文化観光について大分県の事例を挙げながら説明してきた。次にこれら文化観光の分類を前提として大分県文化観光の現状を統計数字により見ておくこととする。

2 大分県の文化観光の現状

大分県全体の観光動態に関する調査は大分県が毎年実施している「大分県観光動態調査」以外に存在していない。従ってここでは大分県全体の文化観光の現状をこの「大分県観光動態調査」に基づいて見ていくこととする¹¹⁾。

「大分県観光動態調査」の調査要領によれば、調査対象となる観光客を、「①観光行楽、②親睦・慰楽、③保養・休養、④療養、⑤研修・見学・調査、⑥登山・スポーツ、⑦その他これに類するもの、を目的として地域に参集する客のすべてとする」と定義している。ただこの調査は県が独自に調査したものではなく、県の示したいくつかの調査方法を参考に各市町村で実施された調査を集計したものとなっている。県の示したいくつかの調査方法を参考にしているとしても市町村の調査方法や調査実施日が明らかでないことからこの統計調査の地域間の比較がどれだけ正確であるか疑問であるところもある。しかし各市町村では同じ方法を毎年採用しているなのでその動態は十分把握できるものと考えられる。

「大分県観光動態調査」では観光地別の詳細な統計は存在していない。従って観光資源別に集計しなおすことは困難であるし、文化観光だけでなく自然観光も含まれた数字になっている。しかし大分県の観光地は自然だけを資源とした観光地は少なく、多くは自然と結びついた文化観光地とみなされる。そこでここでは「大分県観光動態調査」を「大分県文化観光動態調査」と読み替えて見ていくことにしたい。なお以下に使用する図表は大分県観光振興課発行の『平

成14年 観光動態調査』から引用したものである。

図1は大分県の年間の観光客数と消費額の推移を示したものである。これによると平成14年の観光客数は5,447万人（前年比1.0%増）、消費額2,646億円（前年比0.4%減）となっている。観光客数はバブル経済が破綻した平成5年の4,521万人以降上昇を続けているが、消費額は2,600億円台の横ばい状況が続いている。

図2は宿泊観光客数の推移を示している。宿泊観光客数は795万人で前年比0.9%、7万人の減少となっている。バブル経済期のピークは865万人に達したが、平成5年には808万人にまで落ち込み、その後景気回復の兆しとともに平成8年には831万人にまで回復した。しかし、消費税率の上昇や経済不況の影響で平成9年以降低迷を続けている。

図3は日帰り観光客数の推移を示したものである。平成5年にはバブル経済破綻の影響で371万人に落ち込んだ。しかし、その後は年々上昇を続けている。宿泊観光客数が低迷をしているにもかかわらず日帰り客数が上昇し続けているのはなぜであろうか。第1に、高速道路をはじめとして大分県内の道路網が整備され福岡や北九州からの日帰り客が増加したこと、第2に、景気の低迷で大分県民や隣接の県民もあまり宿泊旅行をせず、休日や連休には日帰りのドライブや近くの温泉地などで休暇を楽しむ傾向が強くなったこと、第3に、農村部に新しい行楽施設や交流施設が増えたことなどがあげられる。

図4は発地別観光客数の推移を示したものである。発地別というのは大分県の観光客の出発地という意味で、大分県の観光客がどこから来たかを知ることができる。これによると平成14年の観光客の出発地は福岡県が32.2%で最も多く、次いで大分県内29.4%、その他九州各県（福岡県を除く九州）16.0%となっている。これら三つの出発地はいずれも九州圏内であることから、大分県の観光客は九州からの観光客が77.6%を占めていることになる。九州以外からの観光客は、中国地方5.5%、関東地方4.6%、近畿地方4.6%、四国地方3.1%、中部地方2.2%、その他（北海道、東北、外国人をあわせたもの）2.4%となっており、

(13) II. 大分県の文化観光と別府温泉

各地方に分散している。

図1 観光客数及び消費額の推移

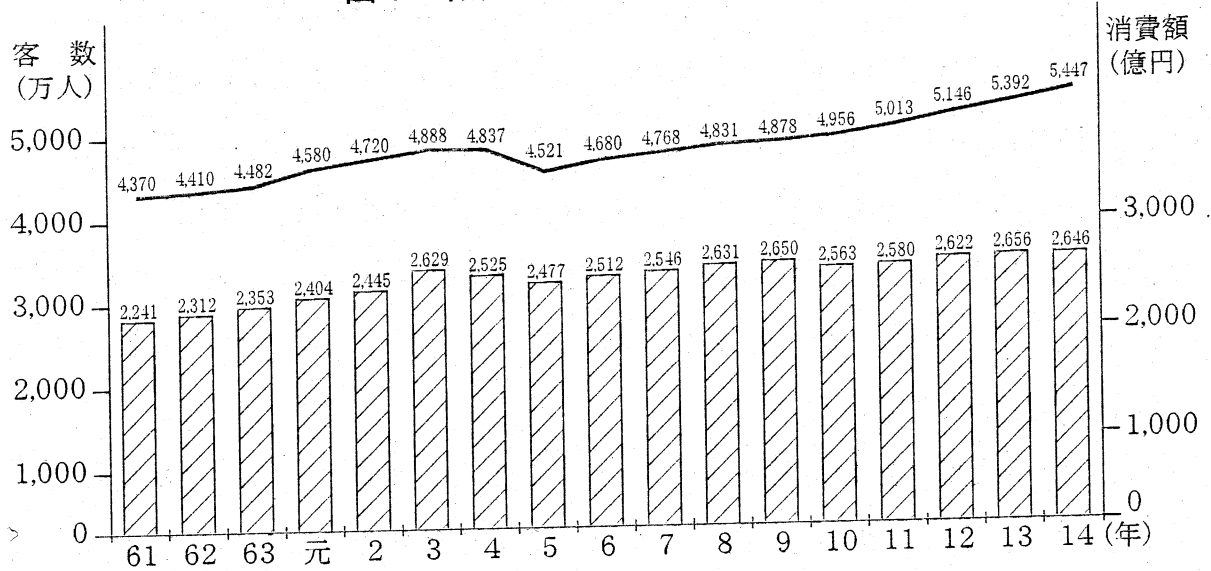


図2 宿泊観光客数の推移

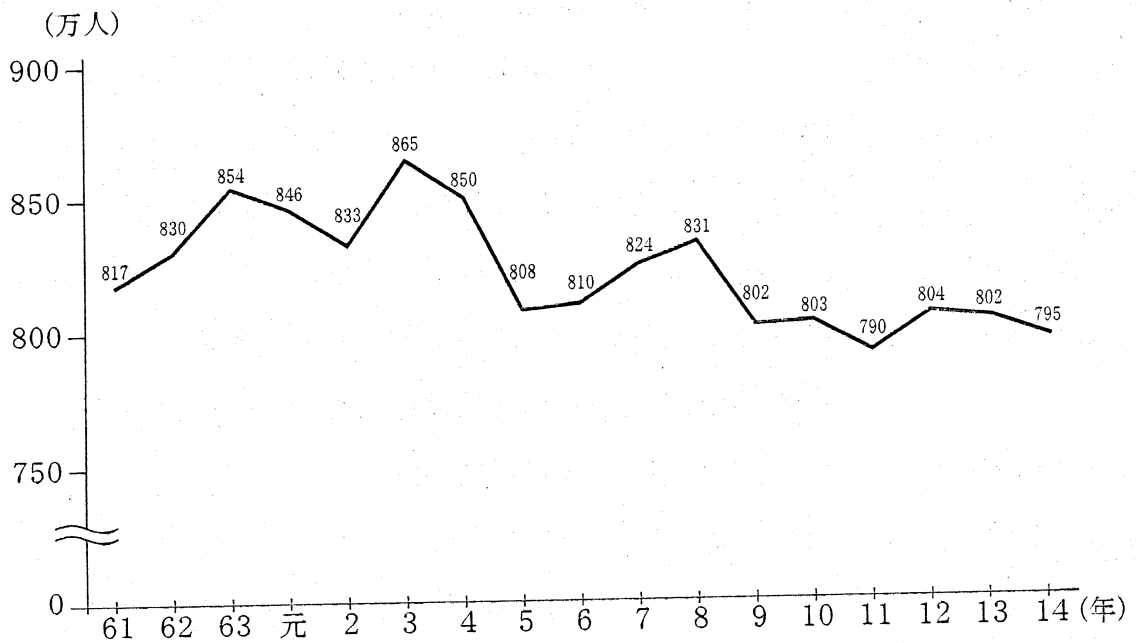


図3 日帰り観光客数の推移

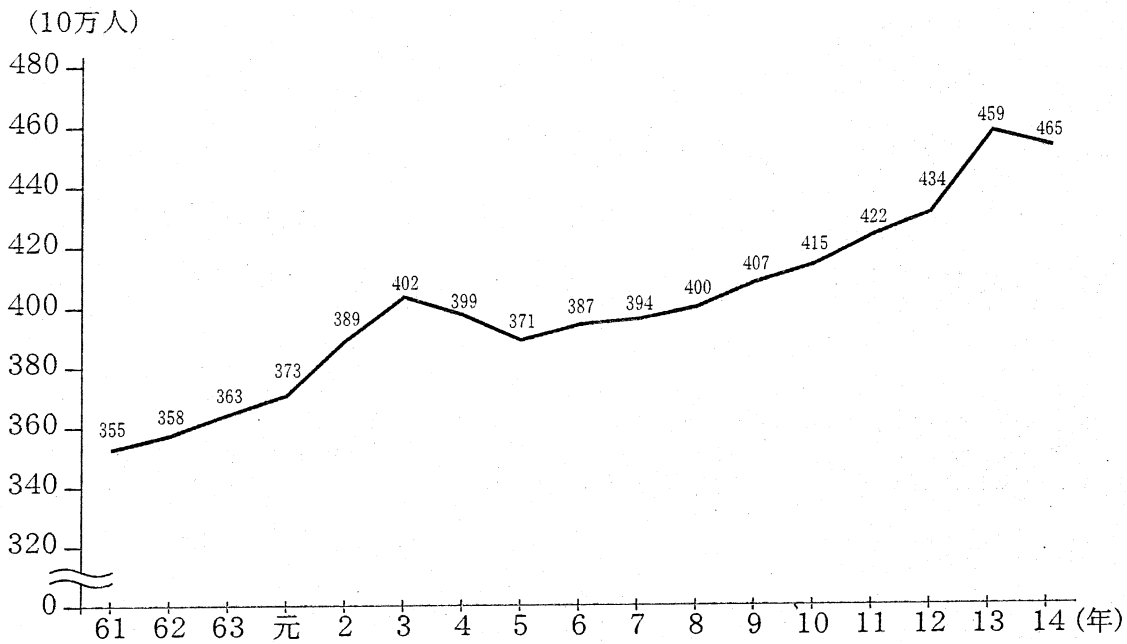


図4 発地別観光客比率

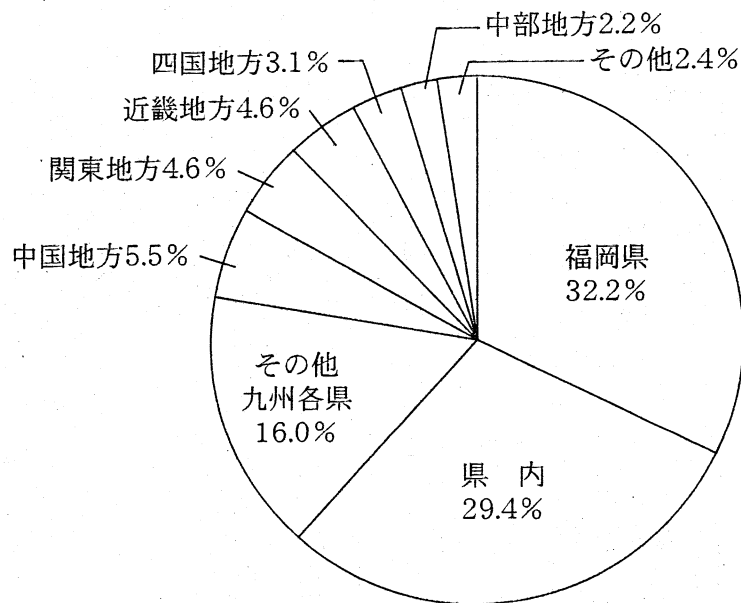


表1は平成13年と平成14年の市町村別観光客数の上位10市町村を示したものである。観光客の多いのは別府市で他の市町村を圧倒しており、平成14年の観

(15) II. 大分県の文化観光と別府温泉

光客数は11,860,000人で別府市に次ぐ九重町の倍以上の人口となっている。別府市・九重町・湯布院町はいずれも温泉文化を資源とした観光地である。第4位の日田市にも三隈川沿いに発達した温泉街がある。天瀬町もまた同じ川沿いに発達した温泉町である。このほか大分県にはさまざまな温泉観光地があるが、これら市町村別観光客数は大分県には温泉目的の観光客が圧倒的が多いことを示している。

図5は市町村別外国人宿泊観光客数とその比率を示している。これによれば別府市が圧倒的に多く、その数は128,674人で大分県全体の75.2%を占めている。次いで多いのは日出町7.0%(12,871人)、大分市6.0%(11,014人)の順となっている。湯布院・九重町はわずか1.8%(3,426人)にしかすぎない。

表1 市町村別観光客数

(単位：千人)

順位	平成13年		平成14年	
	市町村名	観光客数	市町村名	観光客数
1	別府市	11,993	別府市	11,860
2	九重町	5,297	九重町	5,251
3	湯布院町	3,878	湯布院町	3,952
4	日田市	2,778	日田市	2,706
5	天瀬町	2,696	天瀬町	2,652
6	大分市	2,335	大分市	2,424
7	久住町	2,301	久住町	2,309
8	宇佐市	2,228	宇佐市	2,093
9	本耶馬溪町	1,723	安心院町	1,830
10	安心院町	1,594	本耶馬溪町	1,741

図5 地域別外国人宿泊観光客数比率

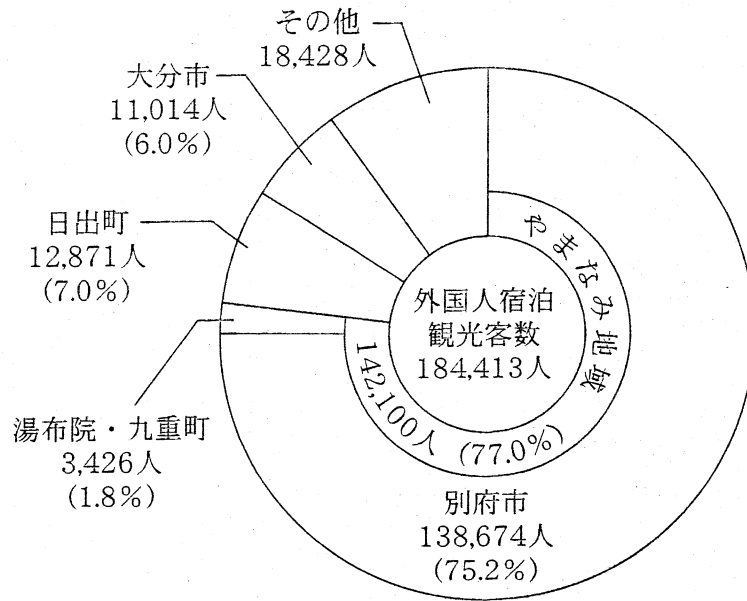


図6 国籍別外国人宿泊観光客数の推移

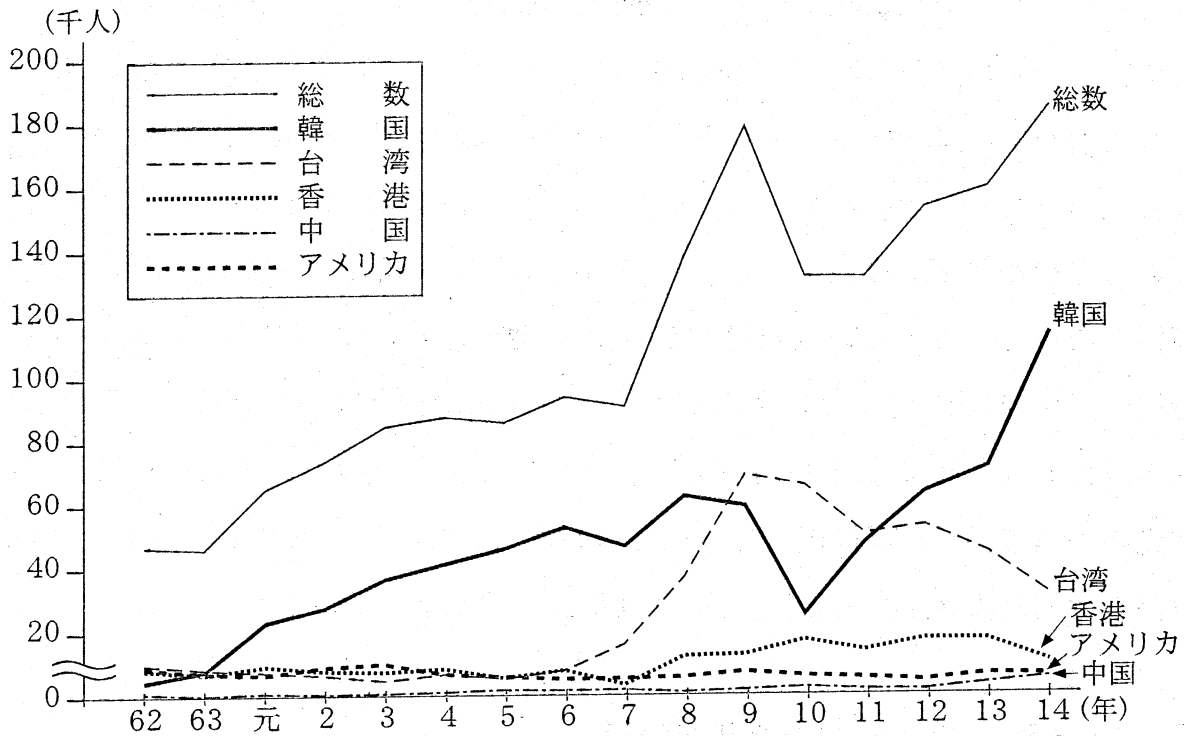
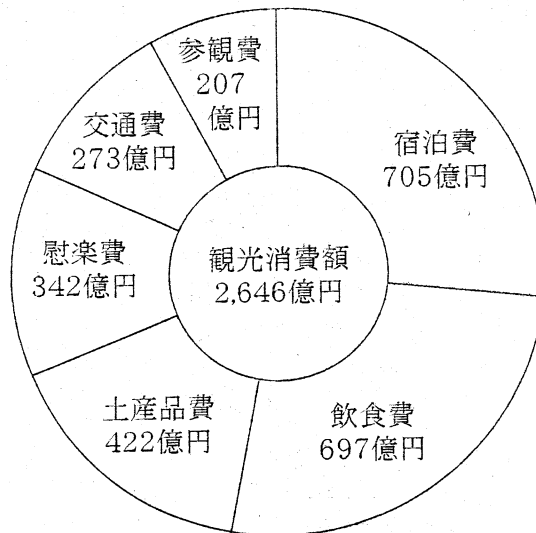


図7 費目別観光消費額



観光のメリットは観光地からすれば観光客が投下する貨幣が地域経済を潤す点にある。図7は費目別観光消費額を示したものである。ここでの慰楽費には、ゴルフ場利用料金など体育・レクリエーション施設使用料や演劇などの娯楽施設の入場料などが含まれている。また参観費には博物館などの入場料や宗教施設の拝観料などが含まれている。この図によれば平成14年の観光消費額は2,464億円となっている。この内訳は宿泊費が705億円、飲食費697億円、土産品費422億円、慰楽費342億円、交通費273億円、参観費207億円となっている。

平成14年観光消費額2,646億円のうち宿泊観光客の消費額は1,329億円、日帰り観光客の消費額は1,317億円とほぼ同じ金額となっている。また、一人当たり消費額は宿泊観光客が16,733円、日帰り客が2,830円となっている。

3 都市型温泉地としての別府温泉

以上大分県観光の現状について述べてきた。統計的数字から大分県の観光がいかに温泉文化観光に依存しているかが明らかになった。そこで次に温泉文化

観光の現状と課題についてさらに詳細に見ていくこととする。

日本の温泉地は大きく都市型温泉地と農村型温泉地に分けられる。都市型温泉地とは都市的空間を形成している温泉地で農村型温泉地は農村的空間のなかに形成された温泉地である。別府温泉は都市型温泉地の典型であり、湯布院温泉は農村型温泉の典型である。さらに、都市型温泉地には別府市・熱海市・伊東市のように温泉観光地が中心となって発展した温泉観光都市と、松山や松江のように江戸時代から政治の中心地として発展し、その市街地の一面に温泉地がある複合型観光都市がある。別府市は最初から温泉観光により発達した典型的な温泉観光都市である¹²⁾。

最近、湯布院や黒川温泉のような農村型温泉地が活況を呈しているのに対して都市型温泉地、とりわけ別府市や熱海市のような温泉観光都市の衰退が指摘されている¹³⁾。別府市と湯布院の統計数字はこのことをよく示している。

表2は別府市観光客数、表4は別府市宿泊施設数の推移を示したものである。表2によれば、宿泊客数は1975年から2002年にかけて一貫して減少し続けている。観光客数と消費額数は1995年から2002年にかけて回復してきているが、これは日帰り客が増加したためであろう。表4により観光・ホテル数を見てみると、1981年から1984年の4年間には526から252へと著しく減少している。収容人員数も40,160人から24,018人に減少している。1995年から2002年にかけて宿泊施設数は188から224へと増加しているが、収容人員は同じである。こうした温泉観光の低迷は表5のごとく別府市の人口の減少をもたらし、市勢にも大きく影響している。一方、表3は湯布院町の活況を示している。1995年から2002年にかけて湯布院町の観光客数・宿泊客数・消費額いずれも増加し続けている。

(19) II. 大分県の文化観光と別府温泉

表2 別府市観光客の動向

	観光客数	宿泊客数	消費額
1975年	12,035,418人	5,494,427人	82,850,394千円
1985年	11,774,438人	4,538,053人	148,737,990千円
1995年	11,197,243人	4,107,734人	142,455,966千円
2002年	11,860,123人	4,006,061人	149,109,523千円

*資料「大分県統計年鑑」より作成

表3 湯布院町観光客の動向

	観光客数	宿泊客数	消費額
1975年	1,500,215人	410,527人	2,204,897千円
1985年	2,724,300人	600,700人	7,383,769千円
1995年	3,811,960人	861,700人	14,618,210千円
2002年	3,952,255人	958,027人	16,370,783千円

*資料「大分県統計年鑑」より作成

表4 別府市宿泊施設の動向

	旅館・ホテル	収容人員
1981年	526	40,160人
1984年	252	24,018人
1995年	188	19,140人
2002年	244	19,141人

*2001年版統計書より様式変更

表5 別府市と湯布院の国勢調査人口の動向

	旅館・ホテル	収容人員
1975年	133,894人	11,371人
1985年	134,775人	12,005人
1995年	128,225人	11,521人
2000年	126,523人	11,407人
2004年	123,715人	11,611人

*2004年は住民基本台帳の8月31日現在

別府八湯といわれるが¹⁴⁾、温泉地としての規模は湯布院の比ではない。源泉数は2,847孔で日本第一位の数を誇っている。全国第二位は湯布院の883孔であるが、3倍以上の差がある¹⁵⁾。源泉数が多いというだけでなく泉質も多様である。地球上には11種類の泉質がある。別府温泉にないのは放射能泉だけで、そのほかの10種類の泉質がそろっているといわれる。また湧出量も1日137,040キロリットルで湯布院の2倍以上となっている。

このような大規模な都市型温泉地が低迷し、湯布院のような小規模な農村型温泉地が活気を呈している原因はどこにあるのであろうか。それは国内旅行を取り巻く社会環境の変化に原因がある。そこで次に原因となっている社会環境の変化を指摘し、そこから生じている別府温泉の課題について述べておきたい。

①会社の慰安旅行の減少

第1の原因として会社の慰安旅行が減少してきたことがある。かつて日本の会社には年に一度社員の慰安旅行を企画する習慣があった。大企業に限らず中小企業でもそうした企画を立てていた。企業は社員の日頃の労働をねぎらい、企業内での人間関係の円滑化や企業への愛着を高め、明日への労働の鋭気を養うことを目的として慰安旅行を積極的に取り入れてきた。高度経済成長期のなかで慰安旅行は、会社への忠誠心をたかめ、生産性の向上を図る日本的経営戦略の一環として機能していたのである。残業などで余暇時間の少ない社員にとっても慰安旅行は楽しみの一つであった。しかし、バブル経済が終焉して長い経済不況が続くなか企業のゆとりがなくなり、慰安旅行を中止したり、日帰り旅行をしたりする会社が増えてきた¹⁶⁾。このことは団体客を減少させ、大規模宿泊施設の多い都市型温泉地に大きな打撃を与えることとなった。今日、慰安旅行が減少してくるなかで、新たな団体客をいかに発掘するかということが都市型温泉地の大きな課題となっている。

②修学旅行のあり方の変化

第2の原因として修学旅行のあり方が大きく変化してきたことがある。別府市はかつて四国や近畿方面から多くの修学旅行生が押し掛け、修学旅行のメッカとも呼ばれていた。日本の学校には修学旅行という慣習があり、現在でも小学校、中学校、高校とそれぞれの段階で修学旅行がある。県や市町村の教育委員会では修学旅行実施基準というものを策定している。これによると小学校は1泊2日程度、中学校は3泊4日程度、高校は5泊6日程度の修学旅行にでかけることになっている。

この修学旅行のあり方が時代とともに変化してきた。全国修学旅行研究委員会が全国の中学校を対象に修学旅行の目的などについてアンケート調査した結果によると、「班行動による協力の心の育成」の比率が60.0%と最も高く、次いで「見聞を広め、知識の修得」51.9%、「総合的な学習の内容の深化」48.1%、「生徒間の人間関係づくり」41.5%の順に高くなっている¹⁷⁾。これらの目的のなかで注目されるのは修学旅行と「総合的な学習の時間」とを結び付ける学校が48.1%と高い比率を示していることである¹⁸⁾。

「総合的な学習の時間」が取り入れられる以前から修学旅行は、「見る」観光旅行から「学ぶ」体験・学習旅行に次第に変化する傾向があった。たとえば1980年代から九州の高校ではすでに京都や奈良などを観光するよりはスキー場に行き、スキーを体験・学習するといった高校が増えていた。

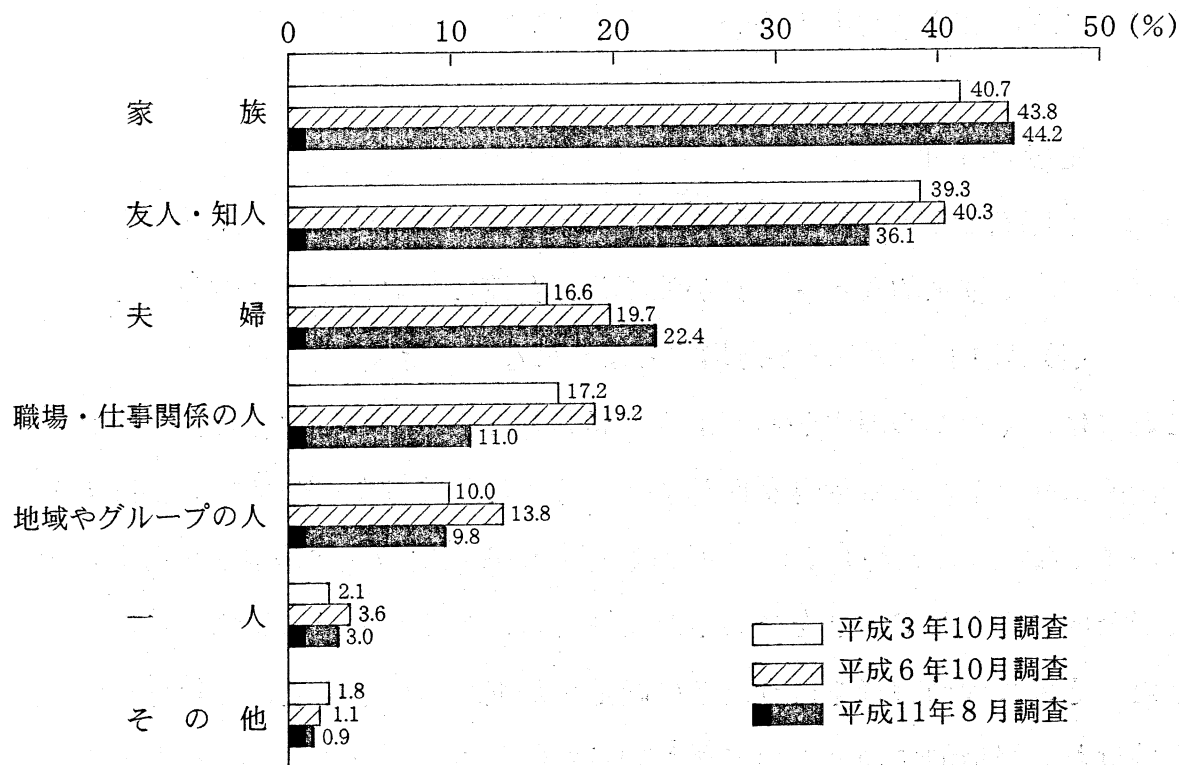
また最近では、異文化を体験するために海外に出かける修学旅行も増えている。全国の公私立高等学校の海外旅行実施状況を見てみると、公立高校では最も比率が高いのは長崎県の41.8%、次いで大分県の36.8%、宮崎県の30.2%¹⁹⁾となっている。全国の実施率は公立高校が12.0%、私立高校が29.7%であり、九州の高校の実施率が高くなっている。これは九州からは東京や北海道へ旅行するよりも韓国や中国へ旅行した方が安価であることが影響している。「総合的な学習の時間」はこうした修学旅行の流れを一層加速させたものと思われる。

いずれにしても「見る」観光を中心とした修学旅行の宿泊地として学校関係者に愛用されてきた別府温泉は「体験学習」を重視する修学旅行に対応した新たな経営戦略を立てない限り修学旅行客は減少していくばかりである。

③旅行のプライベート化傾向

第3の原因として旅行のプライベート化傾向が挙げられる。会社の慰安旅行が減少していくなかで、図8にあるように国内旅行では団体旅行よりも家族連れや友人と旅行する傾向が強くなってきた²⁰⁾。このことも都市型温泉地から農村型温泉地へ観光客が流れる原因となっている。集団に同調するよりも個人の興味を優先させる傾向は旅行だけでなく、日本人の生活全体のなかで進行している傾向であり、社会学者はこうした傾向をプライベート化（私化）現象と呼んでいる²¹⁾。

図8 国内旅行の同行者



(注) 総理府広報室「余暇時間の活用と旅行による世論調査」(11年8月)による。

会社や上司に気遣いしながら旅行するよりも心許せる家族や友人と旅行する方がよほど楽しいと思う人々にとっては団体旅行よりも家族や親しい友人との旅行こそ本当の慰安旅行だといえるであろう。旅行社もこうしたライフスタイルの変化にともなって家族や個人向けのさまざまな国内ツアーを組んでおり、そのことが旅行のプライベート化傾向に一層拍車をかけている。

湯布院のような農村型温泉地が人気を博するのは家族旅行や友人の旅行には都市型温泉地の大規模なホテルに宿泊するよりも自然に囲まれた小規模な宿泊施設の多い農村型温泉地のほうが適しているということがあるのではないかとと思われる。また、家族旅行や友人の旅行は自家用車の利用が多く、大分自動車道など高速道路網の発達により福岡都市圏や佐賀県、熊本県などから湯布院などに来やすくなったことも農村型温泉宿泊客の増加に影響しているものと考えられる。

別府温泉のような大規模な都市型温泉においてはこうした旅行のプライベート化傾向にどのように対応するかということが喫緊の課題である。

④女性観光客の増加

第4の変化は温泉地における女性観光客の増加である。1960年代まで温泉は男性客が中心で歡樂的なイメージが強く若い女性には敬遠されていた。ところが1970年代後半頃より女性客が急増するようになってきた。

これにはいくつかの理由があるように思われる。一つには独身貴族といわれる経済的にゆとりのある独身女性が増え、そうした独身女性が余暇に旅行することが多くなったことがある。日本では1965年から女性の大学進学率が高まり、高度経済成長のなかで大学を卒業した女性たちの多くが企業に就職するようになった。その後国勢調査を行うたびに晩婚化が進み、仕事を続ける独身女性が増え続けた。経済的にゆとりのできた独身女性たちにとって親しい友人との旅行は大きな楽しみとなり、国内旅行・海外旅行とも女性客が大幅に増えていっ

た。

第2の理由としては温泉そのものが若い独身女性のハートをとらえたことである。もともと仕事や日常生活から離れた旅行は人間に解放感を与える。自然の風景を眺めながらゆったりと温泉につかることはそうした旅行の解放感の上にさらなる解放感を与えた。自然景観がよく見える露天風呂は人気を博し、温泉宿は競って露天風呂を設置していった。また、女性が安心して解放感に浸れるよう混浴風呂を改修し、風呂を男性用、女性用、家族用に分けるようになった。また、温泉の美容効果も若い女性たちの心をとらえた。天然温泉の効果は水道水で沸かした風呂にはない効果があり、肌に敏感な女性にとっては大きな魅力となった。さらに、温泉宿で出される工夫を凝らした料理も女性にとっては魅力であり、温泉宿では女性客を獲得するために女性向けの料理を売り物にするところが増えていった。

第3にはテレビや雑誌などのマスメディアの影響がある。土曜日や日曜日のテレビでは旅行番組が増え、雑誌では女性向きの旅行雑誌の売れ行きが伸びてきた。それとともに湯布院のような自然と融合した小規模な農村温泉地が脚光を浴びるようになってきたのである。

第4には湯布院のような小規模な温泉地では女性客をターゲットにしたまちづくりを進めたことが挙げられる。湯布院の中心街には若い女性客が好む店舗が軒を並べている。こうしたまちづくりは盆地に囲まれた小さな町であったからこそ可能であったといえよう。別府のような大規模温泉地では市街地の広がりも大きく、こうした女性向けだけのまちづくりはなかなか困難である。また、規模の大きいホテルではホテルのなかに女性向けの土産品が多く陳列されている。

⑤中高年旅行者の増加

第5に挙げられるのは中高年旅行者の増加である。中高年とは何歳からかと

ということがあるが、ここでは50歳代以上と考えておきたい。最近、国内旅行においても海外旅行においても50歳代以上の中高年の旅行者が増えている。これはなによりも団塊の世代と言われている1946年から1950年生まれの人びとが現在ちょうど50歳代後半になっていることがある。日本の人口構成のなかでこの50歳代はとりわけ多くなっている。

このことは国内観光の年代別参加率によく現れている。余暇開発センターが平成10年12月に実施した余暇活動に関する全国調査によると、年代別参加率は50代が男性においては62.6%、女性においては62.4%と最も高くなっている²²⁾。

50歳代はライフ・サイクルのなかで特別な段階にある。身体的にはこの時期は更年期障害が起きてくる年齢である。社会生活の上でもさまざまな変化が生じてくる。とくに家庭生活においては大きな変化が生じる。50歳代になると子どもが高校や大学を卒業することから親としての教育責任から解放され、教育費の負担が軽くなる人々が増えてくる。50代後半から60代になってくると子どもが独立して夫婦二人の生活になることも多くなる。子どもが独立することで生じる経済的・時間的ゆとりが中高年旅行者の増加につながっているものと考えられる。「冬のソナタ」が中高年女性を熱中させ、韓国ツアーがうけているのは中高年女性の経済的・時間的ゆとりということと無関係ではない。

中高年の旅行は家族旅行か女性どうしの友人旅行が主体であり、基本的には旅行のプライベート化傾向を促進させている。中高年の場合若者とは違って健康に対する関心が強く、温泉地の選択においては大規模な都市型温泉よりは自然に近い農村型温泉を好む傾向がある。別府市においてはこうした中高年、とくに中高年女性の関心をいかに高めるかということが大きな課題となる。

4 「別府八湯」の活性化と行政の役割

以上別府市のような大規模な都市型温泉地が低迷し、湯布院のような小規模

な農村型温泉地が活気を呈する原因となっている社会環境の変化を指摘し、そこから生じている都市型温泉都市・別府市の課題について述べてきた。最後に別府市が低迷から脱し活性化していくためになすべき行政の役割について触れておきたい。

都市型温泉の典型である別府市においては旅行を取り巻く社会環境に十分対応しきれていないことから宿泊施設や宿泊客が減少していることはこれまで述べた通りである。こうした現況を改善するためにはなによりもホテルや旅館の経営者と行政が連携しあいながら共に努力する必要がある。当然のことながら経営者はいかに団体客を確保するか、いかに個人客を引き付けるかといったことを考えなければならない。一方、行政は温泉経営者や市民の声を聞きながら都市全体の魅力を高め、別府市への観光客を増やすために何をすればよいかその経営戦略を考え実行しなければならない²³⁾。

ここでは社会環境の変化のなかで大規模な都市型温泉地の行政が考えなければならない基本的問題を四つほど指摘しておくことにしたい。

①都市型温泉地の個性あるイメージづくり

これは小規模の農村型温泉地の魅力と対抗する魅力をいかにアピールするかという問題である。行政は農村型温泉地に対抗できる都市型温泉地のイメージづくりに努める必要がある。別府温泉の場合「湯けむり」とか「別府八湯」とかがイメージを表す言葉としてよく使われる。重要なことはこうした用語が果たして農村型温泉地の魅力と対抗できるイメージとなり、多くの観光客を引き付ける魅力ある用語になっているかどうかということである。たしかに「湯けむり」とか「別府八湯」は別府温泉を象徴する適切な用語である。しかし、それが農村型温泉地に対抗できるほどのイメージづくりになっているかという点疑問である。

一般に農村型リゾート地に対抗するイメージづくりとして思いつくのは「不

夜城のまちづくり」とか「カジノのまちづくり」とかである。欧米ではカジノの誘致にとくに抵抗感はない。自治体にとってカジノのもたらす経済的効果が大きいからである。ヨーロッパのモナコとかアメリカのラスベガス、中国のマカオなどがそのモデルであろう。カジノのもたらす経済効果は大きい。しかし、こうしたギャンブル・リゾート地は必ず治安の悪化を招きマフィアと麻薬の犯罪都市になる。別府市を「カジノ特区」にし、不夜城の町にすれば必ず暴力団が勢力をもち別府市は犯罪都市になるであろう。いかに経済効果が大きくとも別府市はこうしたギャンブル・リゾート地づくりをめざすべきではない。

それでは農村型温泉に対抗して都市型温泉別府市はどのようなイメージづくりが必要であろうか。別府のイメージをつくるキー・ワードを並べると「湯けむり」「別府湾」「港」「夜景」「鶴見岳」などである。こうしたキー・ワードからすると別府市は「海と山に挟まれた湯けむりの町」である。都市型温泉ではあるが、自然にも恵まれた温泉都市なのである。換言すれば自然の魅力と都市の魅力の両方を兼ね備えた都市型温泉ということになる。自然の魅力のうち農村型温泉にないのは「海」である。別府市のイメージづくりにおいてはこの別府湾の美しい「海」を活かし、観光客を引き付けるのが一つの戦略である。山の空気も人のところを癒すが、大海原も人のところを癒してくれる。海岸部に別府湾を見ながら関サバや関アジ、城下カレイを味わえるシーフードレストラン街を持つ国際的なマリーナを建造して日本のヨット愛好家のメッカにすることも一つの戦略である。

②団体客をいかに引き付けるか。

別府のような大規模な温泉観光地の場合、団体客で発展してきたことから団体客の減少が宿泊客数や温泉施設数の減少に直接繋がっている。団体客を維持し増やしていく努力がどうしても必要である。しかし、会社の慰安旅行や学校の修学旅行が減少し、観光旅行のプライベート化が進んでいくなかでどのよう

に団体客を維持し増やしていけばいいのであろうか。

三つの戦略を考えることができる。第一は外国人観光客、とくに韓国や中国からの団体客を増やす努力をすることであり、第二は高齢者の団体旅行にターゲットを絞ることである。第三はコンベンション・ホールを利用した大規模な会議をできるだけ誘致することである。

外国人観光客の誘致においては行政が旅行社にも積極的に働きかけ、アジアの近隣諸国において別府温泉のPRに努め、外国人観光客向けの観光コースを開発することが大切である。そのためには大分空港からの国際便の維持は不可欠である。また高齢者の団体旅行においては老人クラブの親睦旅行や会社退職者の親睦旅行などに働きかけることが必要である。湯布院が若者向け温泉だとすれば別府は高齢者向け温泉としてPRすればよい。ホテルやまちはバリアフリーに努め、高齢者にやさしい温泉づくりをめざして経営者や自治体の意識改革を図ることが大切である。高齢者は若者よりも豊かである。また、大規模な会議は多くの宿泊施設のある町でなければ開催できない。別府市や大分県は大規模会議の誘致を積極的に支援すべきである。

③女性客をいかに引き付けるか。

すでに述べたように日本においては独身の女性と子育てを終えた50歳代・60歳代の女性が最も経済的・時間的ゆとりをもっている。これらの女性を引き付けなければ温泉地の発展はありえない。小規模な農村型温泉地は田園・山・川といった自然環境のなかで安らぎや癒しを求める女性に人気を博している。湯布院は若い女性に最も人気のある温泉と言われている。これに対して都市型温泉は何をもって女性の心をとらえることができるであろうか。一つは温泉の健康や美容への効能をさらにPRする必要がある。とくに別府温泉には八つの湯元があり「別府八湯」と呼んでいるが、それぞれ泉質が異なっている。なかには泥湯など別府にしかない効能をもつ温泉もある。リュウマチや神経痛、痛風

などに効能のある温泉も多い。こうした効能をもつ温泉は健康志向の強い中高年女性の関心を引き付けるはずである。別府市や観光協会はこうした中高年女性に向けたPRを強力に推進すべきである。

おわりに

政府の観光立国行動計画の影響を受けて県レベルにおいても観光立県を掲げるところが増えてきている。青森県、宮城県、千葉県などがその代表である。大分県も新知事となって観光と地域振興を結びつけた観光・地域振興課を設置した。

観光立県の最も先輩格は沖縄県である。沖縄県は商工労働部観光リゾート局のもとに観光企画課と観光振興課を設置している。沖縄県の観光行政の特徴は観光統計が整備されていること、「観光振興基本計画」がありそれに基づいた事業計画が体系化されていることにある。

大分県も観光・地域振興課を設置し、観光による地域振興を図ろうとしている。しかし、沖縄県と比較すればまだ取り組みが始ったばかりである。「観光振興基本計画」も策定されていないし、目立った事業も行なわれていない。また、多くの県が観光立県を掲げるようになれば観光立県のアピール力は迫力を欠いてくる。これまでみてきたように大分県は温泉文化が最大の観光資源である。たんに「観光立県」ではなく、韓国や中国からの温泉観光客をも視野に入れ、「国際温泉観光立県」を宣言してはどうであろうか。そして別府温泉の再生こそ「国際温泉観光立県」の最大の課題なのである。

注

- 1) 本論文は、「冬のソナタ」のロケ地である韓国の春川(チュンチョン)市において開催された江原道行政学会での発表原稿を加筆修正したものである。なお、この行

政学会のメインテーマは「韓・日間 文化・観光交流と江原道の対応」であった。

- 2) 鎌田正・米山寅太郎著『新版 漢語林』大修館書店
- 3) 足羽洋康保『新・観光学概論』ミネルヴァ書房 106頁
- 4) 10遺産は次の通りである。①法隆寺地域の仏教建造物、②姫路城、③古都京都の文化財、④白川郷・五箇山の合掌造り集落、⑤原爆ドーム、⑥厳島神社、⑦古都奈良の文化財、⑧日光の社寺、⑨琉球王国の城(グスク)及び関連遺産群、⑩紀伊山地の霊場と参詣道
- 5) 矢崎武夫『日本都市の発展過程』弘文堂 1962年 171頁
- 6) なかでも山口県の萩市は有名である。
- 7) 日田市の豆田町には江戸時代の商家が町並みとして残っており、最近国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されることとなった。
- 8) 佐藤誠『リゾート列島』岩波新書 1990年
地域開発『リゾートの課題と展望』 通巻335号 1992年
- 9) グリーン・ツーリズムは農村への旅行であるが漁村への旅行はブルー・ツーリズムと呼ばれている。グリーン・ツーリズムやブルー・ツーリズムに近い用語にエコ・ツーリズムという用語がある。
- 10) 最近多くのグリーン・ツーリズムやエコ・ツーリズムに関する図書が出版されている。主なものには以下のようなものがある。
金子輝美著 『田園リゾートの時代 グリーン・ツーリズムとその底流』 清水弘文堂書房 1996年
多方一成ほか著 『グリーン・ツーリズムの潮流』 東海大学出版会 2000年
井上和衛著 『ライフスタイルの変化とグリーン・ツーリズム』 筑波書房 2000年
宮崎猛編著 『これからのグリーン・ツーリズム ヨーロッパ型から東アジア型へ』 光の家協会 2002年
古川彰・松田素二編 『観光と環境の社会学』 新曜社 2003年
山崎光晴 『グリーン・ツーリズムの現状と課題』 筑波書房 2004年
青木辰司 『グリーン・ツーリズム実践の社会学』 丸善 2004年
吉田春生著 『エコ・ツーリズムとマス・ツーリズム』 原書房 2004年
- 11) 大分県「大分県観光動態調査」平成16年
- 12) 別府市の都市機能全般に関する研究として筆者の次の研究がある。
奥田憲昭 「観光都市と交流人口—別府市を事例として」大分大学経済学部経済研究所研究所報 第30号
- 13) 松田忠徳『検証黒川と由布院 九州が日本の温泉を変えた!』熊本日日新聞 2004年
- 14) 別府八湯とは、別府市内にある8箇所の温泉地、すなわち浜脇温泉・別府温泉・亀川温泉、鉄輪温泉、観海寺温泉、堀田温泉、柴石温泉、明礬温泉の総称である。これらはもともと別々の温泉地として発達したもので、それぞれが泉質や周りの環境に特色がある。大正時代には由布院温泉と塚原温泉を含めて別府十湯と呼ばれていた。
- 15) 第3位が伊東温泉の656孔、第4位が熱海温泉の531孔、第5位が指宿温泉の464孔となっている。
- 16) 岡本伸之編 『観光学入門 ポスト・マスツーリズムの観光学』 有斐閣 2001年

(31) II. 大分県の文化観光と別府温泉

- 17) 『「総合的な学習の時間」の観点からとらえた修学旅行調査報告書』 財団法人全国修学旅行研究協会
- 18) 「総合的な学習の時間」は、①学校が創意工夫して特色ある教育活動が行なえる時間、②国際理解・情報・環境・福祉・健康など従来の教科をまたがるような課題に関する学習を行なえる時間として、小・中学校では平成14年度より、高等学校では平成15年度より本格的に実施されるようになった。小学校では3年生以上から週当たり3時間程度、中学校では週当たり2～4時間程度、高等学校では卒業までに3～6単位配当されている。
- 19) 「平成14年度 全国公私立高等学校の海外修学旅行実施状況」財団法人全国修学旅行研究協会
- 20) 石原はこのことをマス・ツーリズムに対してオルタナティブ・ツーリズムと呼んでいる。
石原照敏ほか編 『新しい観光と地域社会』 古今書院 2000年
- 21) 森岡清美 『現代家族変動論』 ミネルヴァ書房 1993年
片桐雅隆 『プライバシーの社会学』 世界思想社 1996年
- 22) 『レジャー白書 '99』 余暇開発センター 29頁
- 23) つい最近、別府市の諮問機関「別府観光推進戦略会議」が別府観光の再生に向けた方向性や戦略プロジェクトを盛り込んだ報告書を取りまとめた。